



%~~~~~~~~~

さんしゃ Zapping



Vol.26 No.3 (通巻 167号)

2012年12月

<産社学会 ニューズレター>

編集・発行:立命館大学産業社会学会(教員・院生委員会)

事務局:産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp

〔目 次〕

<学会・研究会報告>			
日中社会学会第 24 回大会	文	楚雄	p.2
舞踊学会第17回定例研究会(春季特別大会)	遠藤	保子	p.3
<学部共同研究会>			
ボート・シュトラウス作『カルデヴァイ・ファルス』 女たちがやってくる!	仲間	裕子	p.5
<研究所紹介> 人間科学研究所の所長って?	松田	亮三	p.7
<図書出版>			
『福祉国家再編の政治学的分析-オーストラリアを事例とし て-』	加藤	雅俊	p.8
< 社会学研究科院生 OB· OG 報告 >			
博士課程を終えて・・・	伊藤	修毅	p.10
豊かなネットワークの強みを活かして	大川	聡子	p.11
社会学研究科での思い出	高橋	京子	p.12
研究職に就くために必要なこと	平岡	俊一	p.14
仙台から近況報告	藪	耕太郎	p.16
自分の目標を「しつこく」追いかけよう	ユイカンル	ス バユス	p.17

<学会・研究会報告>

日中社会学会第24回大会

文 楚雄

2012年6月2日(土)、3日(日)の2日間にわたって、日中社会学会第24回大会が、衣笠キャンパス創思館のカンファレンスルームで開催されました。梅雨の時期でお天気が心配されましたが、幸い天候にも恵まれ、暑くも寒くなく、快適な二日でした。

特別講演、2つのシンポジウム、4つの分科会など、かなり豊富なプログラムで、中国社会に対する関心の大きさや研究の深さを感じさせられました。とりわけ若手研究者の研究発表、シンポジウムや分科会における積極的な発言・議論には、目を見張るものがありました。

開会式では、有賀郁敏学部長は、開催校と しての挨拶を行いました。特別講演では、立 命館大学副総長・立命館アジア太平洋大学学 長の是永駿氏は、「想像力と社会――文学の 方法としての東アジア――」を題して、アジ ア太平洋大学の国際交流の実践を交えなが ら、文学と社会について熱く講演してくれま した。シンポジウム(1)「21世紀東アジア 社会を比較する視座」では、パネリストの林 家彬(中国国務院発展研究センター)、王京 (北京大学)、浅野慎一(神戸大学)、首藤明 和(兵庫教育大学)は、コメンテーターの彭 純(新華社・日本チャンネル)、池本淳一(早 稲田大学)、中村圭(同志社大学)を交えて、 それぞれの視点や立場から、東アジアの社会 について鋭く議論しました。大会終了直前の シンポジウム(2)「現代中国の福祉と家族」 では、パネリストの王文亮(金城学院大学)、

施利平(明治大学)、周知(寧波大学)は、コメンテーターの RAJKAI Zsombor Tibor(京都大学・院)、郭芳(同志社大学・院)と共に、中国の福祉や家族について熱く議論し、会場の参加者を巻き込んで、「時間の関係で簡潔に」という注文が出るほど、議論に熱が入り、多くの若手研究者は最後まで残りました。

分科会では、「高齢者の生活と福祉」、「農村」、「文化・価値」、「国際移動と結婚」の四つのテーマに分けて発表が行われました。発表は若手研究者が大多数を占めていました。本学部の院生徐玲さんも「中国都市部の高齢者の社会的養老――国有企業定年退職者を中心に――」というテーマで発表を行いました。大会終了後、開催校の立場から若手研究者に簡単なインタービューをしまして、多くの人から、若手研究者・ベテラン研究者・外国の研究者が一同に集まって議論するのは大変刺激を受けたと話してくれました。

2013年の第25回大会が、東京で行われることに決定しています。

舞踊学会第17回定例研究会(春季特別大会)

遠藤 保子

(舞踊学会例会担当理事)

2012 年 6 月 3 日 (日)、舞踊学会第 1 7 回定例研究会(春季特別大会)が、本学志学館 121~123 教室において、1. 一般研究発表、2. 修士論文発表、3. 博士論文発表、4. ラウンドテーブルという 4 部構成で開催された(表 1 参照)。

表 1 舞踊学会第 1 7 回定例研究会 (春季特別大会) プログラム

一般研究発表 会場:志学館 121

No	時間	演者	演題	座長
1	10:00~ 11:00	花輪 充	坪内逍遥が「家庭用児童劇」にて唱 える三綱領「簡単」「純撲」「無邪気」 の意味を探る一劇づくりと実演を 通して一	丸茂祐佳
2	11:00~ 12:00	稲田奈緒 美 市瀬陽子	フランスにおけるダンス指導者国 家資格の現状と背景	細川江利子

* 発表 40 分、質疑 20 分

昼食 (理事懇談会、会場:志学館 123)

	13:00~	藤堂寛子	ダンスの「書き方」論 – William	# よ!
3	13:45	滕星見丁	Forsythe に拠る-	貫成人

* 発表 30 分、質疑 15 分

修士論文発表

No	時間	演者	演題	座長	コメンテ ーター
4	13:45~ 14:15	伊藤雅子	アンドレ・レヴィンソンと 20 世紀 ダンス	貫成人	尼ヶ崎 彬

*発表 20 分、コメント+質疑 10 分

博士論文発表

			神霊を生きる人びとの『現在』-		
_	14:15~	竹村嘉晃	南インド・ケーララ州のテイヤム	古様古フ	石井達朗
э	15:00	竹州新光	祭祀の実践者たちをめぐる民族	高橋京子	橘健一
			誌的研究—		

6	15:00~ 15:45	富田大介	習慣の原理についての一考察ー「心体操」の理論的基礎付けに向けて-	遠藤保子	外山紀久 子 稲田奈緒 美
---	-----------------	------	----------------------------------	------	------------------------

発表 30 分、コメント+質疑 15 分

ラウンドテーブル 会場: 志学館 123

No	時間	名称	オーガナイザー (兼スピーカ ー)	スピーカー
7	16:00~ 18:00	震災と舞踊	村田芳子	弓削田綾乃 砂連尾 理 粟谷佳司

本大会では、舞踊学会として初めてラウンドテーブルが企画・開催され、本学部の粟谷 准教授が、スピーカーの一人として話題を提 供した。ラウンドテーブル設定の趣旨と概要 は、以下である。

2011 年 3 月、東北・関東を襲った東日本大震災は、各地に甚大な被害をもたらし、多くの尊い命を奪うとともに、日本中がかつて経験したことのない大きな試練に直面した。誰もが「自分にできることは何か」を考え、その「思いをカタチに」した復興への支援は、日本中に、世界中に広がっていった。その中で、ダンスが今社会で果たすべき役割とは何かを考え、と同時に、ダンスが大きなストレスを抱えた心と体を癒し、人と人をつないで内から元気にする大きな力を持つことを改めて感じてきた。

震災から1年以上が経過した現在も、「3.11の記憶」は色褪せることなく、震災は、大きな痛みと引き換えに、我々にそれぞれの原点に立ち返る問いを投げかけ、「現実から学ぶ」ことの重さを実感として教えてくれたことの意味は大きいと考える。

震災以後、震災をめぐるテーマからの様々

なシンポジウムや研究会が開催されてきているが、今回は、「震災と舞踊」をテーマに、 そのかかわりに焦点を当てていく。

その多面的なアプローチとして、4名のス ピーカーから話題を提供していただき、ラウ ンドテーブルという形式で参加者と議論を 深める。1人目のスピーカー・弓削田綾乃(早 稲田大学・助教)は、原発事故の被災地・福 島の子どもを対象としたダンスの実践と地 域行政の取り組みについて報告し、2人目の スピーカー・砂連尾理(コンテンポラリーダ ンサー) は、仙台での幅広いダンス活動の実 践を話題にした。3人目のスピーカー・粟谷 佳司(立命館大学・准教授)は、音楽とメデ ィアの力を中心に被災地支援の活動を報告 し、4人目のスピーカー兼オーガナイザー・ 村田芳子(筑波大学)は、被災した茨城と筑 波大学の状況と大学から発信した様々な支 援活動におけるダンスの可能性について報 告した。

スピーカーの貴重な話のあと、舞踊学会員 と様々な意見交換が行われ、有意義な学会大 会となった。

<学部共同研究会>

ボート・シュトラウス作『カルデヴァイ・ファルス』、 女たちがやってくる!

仲間 裕子

日時 : 2012 年 10 月 1 日 報告者: ヘンリー・トーラウ氏

(トリア大学教授)

ボート・シュトラウスの『カルデヴァイ・ ファルス』は 1982 年 1 月、ハンブルクのド イチェス・シャウシュピールハウスで上演さ れた後、ベルリン・シャウビューネを初め、 ウィーン、アムステルダム、ストックホルム といった国外の劇場でも次々に取り上げら れ、人気を博したという。こうした作品群に よって、シュトラウスはドイツ現代演劇の中 心的作家としての名を確立した。報告者のへ ンリー・トーラウ氏は、1979-1980年に「今 日の演劇」誌の編集長、また 1981-83 年に 前衛演劇で知られるベルリン、フォルクスビ ューネのドラマトゥルクを務め、演劇の批評 や上演に従事されている。この点において、 シュトラウスの経歴(1965-70年、「今日の 演劇」誌の記者、1975年までシャウビュー ネのドラマトゥルク) に通じている。

戯曲の第一場は、オーケストラの団員である男と女の会話で始まる。男はタキシードでフルート。女はロングドレスでバイオリン。「女:愛しているわ。私を見て。男:ありがたいことだ。女:いつまでも優しくしてね。男:まだ君はぼくの前にいる。やがて君は去ってそして突然にすべてが過去になってしまう…女:私を留めて!しっかりと引き留め

て!男:いずれまた、いつまでもずっと!」。 暗い舞台のスポットライトのなか、幻想的・ 美的な空間設定にもかかわらず、男女のすれ ちがいの印象は否めない。第二場は一転して 酒場の騒々しい雰囲気。口汚く仲間の悪口を 言いあう二人のウーマン・リヴで同性愛の M とK。そこに第一場の女が登場し、彼女たち に別れた男を憎んでいると訴える。「この女 は上流中産階級の退屈で、満ち足りた男女関 係の典型である。そこではもう何も起こらな い。確かに、その方が楽だから、まだ一緒に 寝て、まだ食事に出かけるにしても、ふたり はそれぞれ別のことを夢想している。...Mと K は女を虐待する男たちを罰する殺人部隊 だ。身を守り、自分たちの意志を押し通す女 たち」とトーラウ氏は注釈する。

第三場は男の家のリヴィングルーム。男は彼女が別の二人の女を連れて来ているのに驚く。とても愛想よくふるまうが、怖れ、おびえているのだ。女の態度は、始めはアンビバレントで、「ここに私はいるわ...ここであなたを見つめているの。なぜ私を引きとめないの。なぜ私を受け入れないの」と男の気を引きもする。しかし、女たちは男を罵倒し、最後に八つ裂きにする。女はバラバラの身体

を持って走り去り、それを洗濯機の中に押し 込む。MとKも女に習って同じことをする。

共同研究会では、時間の制限もあり、第1 幕がビデオで紹介された(シャウビューネ 版)だけだが、物語を続けて追えば、この残 **虐な光景が、第2幕に男が再登場することに** よって、実は錯綜した夢想のシーンであった ことに気づく。また題名となっている第二の 男、カルデヴァイが、この幕(女の誕生日の 場面)で登場し、「招からざる」男として女 たちの'夢'を邪魔しもする。確かに、彼は 女たちに追い詰められて机の下から、突然姿 を消すのだが、第三幕になると、悩める男と 女たちが行き着く精神療法の医者であるこ とが暗示される。

トーラウ氏は、劇の全体が終末のセラピー のサイコドラマであるとし、古来繰り返され る喪失と救済の神話と悲劇によって分析す る。「自然によって神聖化された彼女たちは、 血のきずなを損なうあらゆる者を追う、仮借 のない復讐の女神で、オルフェイスを八つ裂 きにする。八つ裂きは儀礼的死であり、ディ オニュソス崇拝の圏域にある。犠牲者の生き た身体をばらばらに引き裂くのは、放縦な自 然の衝動が解き放たれたエクスタシーの極 点を意味した。」一方、救済もオルフェウス の物語からであり、男がフルートで演じるモ ーツアルトの≪魔笛≫ (オルフェウスの竪 琴) が男と女を救済する力となる。といって も、題名に含まれるファルスという語はいう までもなく笑劇を意味する。巧妙に謎めいた 人物のカルデヴァイにおいて、救済の「神」 から「白衣の神々」(医者)への道が茶化さ れているのだ。 断片、夢、幻覚が錯綜する なかで、トーラウ氏は「何が真理なのか、何 が夢なのか、今のこの瞬間、何が正しく、何 が正しくないのか」と問うが、精神療法は核

心において、真理問題を回避すると言えなく もない。

それでも、女たちがベルリン訛りで語る次 のような印象的な言葉には、"真理"が顔を のぞかせている。「あたしたちふたりは昔は 魔女だった。世界は男たちに支配され、壊さ れてしまうと思ってたから...あたしたちの 眼には何の価値もないものをたくさん壊し たわ。うそっぱちのうわべの後ろに、もっと いい生活が現れると信じていたから」。しか し、その彼女たちも、「でも、今はもうそん なことは信じない」という。

『カルデヴァイ・ファルス』がベルリンで 初演された 1982 年に、筆者はベルリン自由 大学に留学中で、東西を隔てる壁と有刺鉄線 のなかで暮らす緊張感は今も忘れない。映画 『クリスチーネ・F 麻薬と売春の日々』 (原 題は「われらツォー駅[ベルリンの当時の中 央駅]の子供」たち)が前年に公開され、ま た、男女を問わず、同性愛の権利を求めたデ モも頻繁に行われていた。また、ベルリンで 同年、「時代精神展 Zeitgeist」が開催され、 社会への批判的メッセージを込めたドイツ 現代美術が国際的に評価され始めていた。 『カルデヴァイ・ファルス』はそうした80 年代のドイツ社会の葛藤とその行く末を映

し出している。

<研究所紹介>

人間科学研究所の所長って?

松田 亮三

人間科学研究所の所長を拝命してから、早くも2年がたとうとしている。いまさらではあるが、この場を借りて研究所所長が何をしているかについてご紹介しておきたい。ところで、研究所というと何か建物が思い浮かぶかもしれないが、ここでいう研究所とは組織のことである。もっとも、創思館には所長室があり、さまざまな活動を管理された環境で観察しつつ実施する社会臨床ラボなど研究プロジェクトを推進するための設備、部屋がある。

立命館大学の研究所は学部に附属しているものではなく、学部横断的学際的研究の推進のためにおかれている。とはいえ、実際上主に関与している学部・研究科はあり、人間科学研究所の場合、それは文学部心理学専攻、産業社会学部、応用人間科学研究科である。

さて、研究所所長は何をしているかといえば、大まかにいって研究活動のプラットフォームとしての研究所を発展するような活動をしている、ということになる。残念ながら、本学では恒常的に専任研究員や教員を研究所におく体制が最初から準備されている分けではない。さまざまな教員・研究者が参加するプロジェクトを推進するのを支援し、相互の調整・交流を促進することが、実際的課題となる。

まず、研究財源および設備・施設の調達に 関する活動である。この間研究所は3度にわ たって文部科学省の私学研究高度化に関す る事業に取り組んできたが、このような大規 模なまた大学単位で取り組む研究事業に関する調整・推進である。近年では、大学独自として研究所での研究発展を狙った基盤的研究経費も若干形成されてきており、この資金をどのように有効に活用するかということを検討し、制度化するのも所長業務の一つである。

実際の研究活動そのものは個々の研究 者・研究グループに委ねられるので、所長と してはどうしようもない。そこで、もう一つ の大きな役割は研究プロジェクトそのもの や研究成果の発信の促進ということになる。 後者に関わるものとして、学術雑誌『立命館 人間科学研究』の発行がある。この雑誌は前 任の望月昭文学部教授の尽力により学外の 査読者を含む査読体制をとって、投稿論文を 中心にした編集を続けている。この編集実務 は事務局と編集委員長である所長が行って おり、これは経験のある方はご理解いただけ ると思うが、かなり煩雑である。今年度はこ の雑誌についての規程も改訂する作業をす すめているが、これもなかなかやっかいな作 業である。

雑誌は研究成果そのものを発信する手段であるが、もちろん多くの成果は学会誌や図書によっても公表されるので、それらを含めた成果のリストやハイライトをウェブにより発信することにも取り組んでいる。さらに、この間の産社の実践に触発されて、研究会の成果を動画で発信できないかを検討中である。これ以外にも衣笠総合研究機構関係の用

務がそれなりにあり、なかなかに忙しい。

この間研究所の重点研究として取り組まれてきた対人援助についての研究は、ひききもり支援、発達障害のある人への学習支援や就労支援、家庭内暴力の加害者への支援、DAISYを用いたコミュニケーション支援、男性介護者支援、ケアの制度比較など、社会学、

心理学、社会福祉に関わる多彩なものである。 こうしたテーマに関心のある方が、より多く 研究所のプロジェクトに御参画いいただく ことを願っている。

<社会学研究科OB・OG報告>

博士課程を終えて・・・

伊藤 修毅

(日本福祉大学 子ども発達学部)

早いもので社会学研究科博士課程後期課程での3年間を終えて8か月たちました。運よく大学の専任教員の職に就くこともでき、研究者としての第一歩を順調に踏み出すことができました。これもひとえに、社会学研究科の先生方、そして、一緒に学びを深めてきた院生のみなさんのおかげです。まず、最初に、みなさんに感謝の意をお伝えしたいと思います。ありがとうございました。

「新しい職場での状況、抱負、決意など」とのご依頼でしたので、本稿では、この4月からの私の仕事についてご報告させていただきます。私は、現在、日本福祉大学子ども発達学部心理臨床学科に助教として勤務しております。この学科には、特別支援学校教諭の免許が取れる教職課程が置かれており、この教職科目である「知的障害児教育論」「知的障害児指導法」「肢体不自由児教育論」「肢体不自由児指導法」を担当しています。合わ

せて、総合演習 I (1年生のゼミ)と子ども 発達学専門演習 I (3年生のゼミ)も持たせ てもらっています。私は、大学院に入る前は、 特別支援学校(当時は養護学校)の教諭でし たし、その頃から、「学校教育の向上・発展 は教員養成から」と思っていましたので、こ の仕事に就けたことは本当に嬉しく思って います。幸い、やる気に満ちた学生たちに囲 まれ、日々、心地よく仕事をさせてもらって います。

ちなみに、この心理臨床学科は、次年度から心理臨床専修と障害児心理専修という二専修体制になり、私が所属することになる障害児心理専修では、障害者理解関係、そして特別支援教育関係の科目が充実します。お知り合いの高校3年生で障害児・者の教育・支援に興味のある方がいらっしゃいましたら、「ニップクがいいよ!」と一声お願いします。さて、大学の教員のもう1つの仕事は「研究」です。私は、社会学研究科在学中は、主

に障害者の就労支援の分野の研究をしていました。現在は、講義テーマに近い特別支援教育分野の研究にシフトしています。「シフトしている」というのは、あくまでも学問領域区分上の問題で、私の中では「両者にまたがる研究」をしているつもりです。障害のある人の人生が学校教育の終わる18歳でプツリと途切れるわけではありませんので、18歳までの教育と18歳以降の就労や福祉

の課題を切断する必要はありません。しかし、 両者にまたがって研究している人はとって も少なく、それぞれの分野間を隔てる「見え ない壁」は意外に高かったりもします。恋愛 同様、フタマタは崩壊につながるのかもしれ ませんが、当面は、フタマタ研究を追求して いきたと思っています。

豊かなネットワークの強みを活かして

大川 聡子

(大阪府立大学 看護学部)

私は2002年に当時保健師として勤務していた市役所を退職し、立命館大学応用人間科学研究科修士課程に進学しました。大学院に進学することを、立命館 OB である直属の課長に伝えた際、「りっちゃんに行くなら(退職願を)受理しないわけにはいかないな」と言われ、隣の課長には「娘が来年立命に入学するので、よろしく頼む」等、多くの立命館OBの上司・同僚に声をかけていただきました。関東にある職員数1000人規模の市役所に、これほど立命館の関係者が多いとは思いもしませんでした。先輩方が大学時代の話を聞かせてくださったこともあり、大学院入学にあたっての不安は全くありませんでした。

応用人間科学研究科には、2 期生として 2002年4月~2004年3月まで在籍しました。 そこで学んだことは一言では言い表せませんが、最も大きな学びは、その人の生き方の ありのままを尊重し、各々の生き方に合わせた支援の枠組みを考えるといった視点でした。私は保健師として、それぞれのケースの

弱点、援助が必要な点ばかりに目が行きがち になっていました。研究対象とした若年母親 に至っても同様でした。また、日本での若年 母親に関する論文も、若年母親のリスクを中 心にした論調が殆どでした。しかし、若年母 親のインタビューを進めていく中で、こうし た論調に違和感を覚えるようになりました。 いわゆる「望まない妊娠」ではないケースも 少なくなく、同世代の横のつながりを生かし て子育てをしたり、母親となることが新たな 社会とのつながりを作るきっかけとなって いるなど、若年で出産する事の「強み」もあ るとわかりました。他方、若年出産が先進国 中で最も多いアメリカでは、若年出産の背後 に家族背景、経済的不利や母親自身の意思が あることを明らかにし、母親の人生の中で出 産がもたらす意味を問う研究が報告されて いました。私自身も、若年妊娠・出産するこ とをリスク視するのではなく、妊娠に至るま での社会的背景に注目し、若年母親という生 き方を尊重するための環境をどう整えるべ

きか検討したいと考え、修士論文の方向性を 決めました。修士論文の執筆過程で、若年母 親が抱える社会的に不利な状況は、単独の機 関の関わりによって改善できるものではな いと感じました。このため、若年母親を支え る社会の仕組みのあり方を研究したいと考 え、2005 年 4 月に社会学研究科博士後期課 程に進学しました。

研究を続ける一方で、2006年11月に長男、2009年12月に次男を出産しました。長男の時は育児で精いっぱいでしたが、次男の時は少し余裕ができ、出産翌日から産社論集の締め切りが気になっていました。出産2日後には病院のロビーで中村先生にお電話で論文へのコメントをいただき、私が必死に書き取っていた様子を見て、分娩を担当していただいた医師が、驚いた顔で通り過ぎて行った事を覚えています。

博士論文を提出したのは2012年3月でした。出産・育児のため休学していた期間もありましたので、博士課程入学から7年かかった事になります。主査・副査の先生方には長期間の在学中、亀の歩みのように止まったり歩みを緩めたりしていた論文を丁寧にご指導いただきました。また執筆過程で、社会学研究科の先輩方や応用人間科学研究科の

元同級生、元同僚の質的研究者に質的データの妥当性をトライアンギュレーションしていただきました。修士課程在学中からお世話になっていた方々にコメントをいただくのは楽しく、またインタビューデータに息を吹き込んでいただいたようにも思います。頂いた沢山のご意見を十分に反映できるのか不安になった時期もありましたが、何とか締め切り 1 時間前に論文を提出することができました。

私は、大学院在学中に大阪府立看護大学 (現:大阪府立大学看護学部)に就職し、今 年で11年目になります。そのため、博士課 程を修了してもこれといった変化はありま せん。若年母親のライフプラン構築支援や、 子どもと母親の成長に伴うニーズの変化の 調査など、博士論文でできなかったことはま だいくつも残っています。今後も若年母親の 研究をライフワークとして取り組みたいと 考えています。

最後に、ネットワークの豊かさが立命館の強みだと思います。私自身も、修士課程進学から博士の学位授与に至るまで、多くの先輩方に支えていただきました。後輩の皆様もぜひこうしたネットワークを生かして、論文をより良いものにしていってください。

社会学研究科での思い出

高橋 京子

(フェリス女学院大学 文学部)

私は、2003 年 4 月に立命館大学社会学研究科博士課程後期課程に入学した。それまでは東京の国立の女子大で学んでいた。したがって、20 代半ばに

もなって初めて経験する関西での生活 への不安とともに、国立大から私大へ、 女子大から共学への変化についていけ るのか、男性のいる環境に馴染めるの かなどの不安もあり、沈んだ気持ちで 入学式を迎えたのを記憶している。

入学してみると、男女ともに一人暮 らしの同世代の仲間が多く、よく定食 屋に行ったり、時にはレンタカーを借 りて日本海側までおいしいものを食べ に行ったりもした。春にはビール片手 に平野神社でお花見をし、夏にはビー ル片手に嵐山で花火をし、ダンス漬け の東京の生活では実現できなかった大 学生のような生活を楽しんだ。また京 都という場所は世界遺産の前を自転車 で駆け抜ける優越感を、私に味わわせ てくれた。観光シーズンになれば、観 光名所のバス停にできた長蛇の列の横 を颯爽と自転車で駆け抜ける。「これが 優越感か」と思ったほどだ。初雪をか ぶった金閣寺を真っ先に見ることがで きたときは、この上ない最高の気分だ った。

入学当初は不安でいっぱいの立命館 大学での院生生活だったが、優越感を 味わわせてくれる京都という土地で、 同じ夢に向かう素晴らしい仲間に加え、 心から尊敬する恩師に出会えたことで すべてが充実したものとなった。

私は東京でのダンサー生活か、京都での研究者の卵生活かで散々悩んだ挙句、修士論文でやり残したことをもう少しきちんと研究したいのと、「舞踊人類学を学ぶには、この先生しかいない」との2つの理由で立命館大学社会学研究科を受験した。その先生こそが恩師遠藤保子先生である。保子先生にはかなら強表を伺う程度であった。受験を決意し連絡をした際、雲の上の存在が一

気に目の前に現れたようで、心臓が口から飛び出るほどドキドキした。遠くから伺う保子先生はお美しく、オーラを放ち、近寄りがたい気がしていたが、実際お会いすると美しさはそのままだが、非常に気さくで、とても親身に受験の相談に乗って下さった。博士課程後期課程から受験するなど異例のことだったが、受験のアドバイスをしていただき、なんとか合格できた。

在学中には憧れの保子先生のご研究 を間近で体験させていただく機会が 多々あった。まずはナイジェリア、次 にケニア、そして今年もガーナに行く 機会を与えられた。日本から 24 時間 近くかけて訪れるアフリカの地でも、 保子先生はいつもの調子で笑い、怒り、 食べ、インタビューし、現地の生活に 馴染んでいらっしゃる。毎回保子先生 のパワフルさに圧倒される。またイン タビューも、現象について尋ねるだけ ではなく、例えば太鼓の素材、演奏す る方角など言語に加え、ご自身の身体 を用いて踊ってみるなど、ありとあら ゆる角度から行っておられる。この体 験学習は、恩師のフィールドワークの 様子を目の前で学ぶことができ、私の 研究者人生において偉大な財産となっ ている。そして自分のフィールドであ るインドでも、常に保子先生のような フィールドワーカーを目標に据えて過 ごすようになった。

こんな私も、今年 4 月から横浜のフェリス女学院大学文学部コミュニケーション学科の専任教員として着任した。 大学では専門分野であるノンバーバルコミュニケーションとしての身体表現 を担当している。現在の専門科目は、 実技授業の2年生のプレゼミと、3、4 年生の専門ゼミである。身体表現とい っても前任者から引き継いだ現4年生 の興味関心はまちまちで、日本舞踊や ミュージカル、ホラー映画にみられる 身体表現から、ピンナップ、アロマテ ラピー、手話などである。学生一人一 人と対面し、喉をからしながら卒業論 文・卒業制作の指導をする中で、論文 の書き方から一語一句に及ぶまで、教 育者としての愛情いっぱいの保子先生 のご指導を思い出した。共通科目とし ては、実技授業の創作ダンス、フィジ カルエクササイズ、世界の舞踊、軽ス ポーツを担当している。フィジカルエ クササイズとは、立命館大学在学中か ら研究対象にしている南インド、ケー

ララ州のマーシャルアーツ、カラリパヤット Kalarippayattu である。在学中、カラリパヤットについての原著論文を産社論集にも書かせていただいた。この研究対象との向き合い方も、保子先生の「実際に体験してみては」というご指導があったお陰で現在に至っている。

このように振り返ってみると、20代 半ばにして思い切った立命館大学への 進学は、私にとって人生の転機だった ように思う。まだまだ足元にも及ばな いが、保子先生のような多角的に物事 をとらえられる研究者、学生を愛せる 教育者、そして素敵な女性になること を夢見て、これからも与えられた環境 で精進していきたいと思う。

研究職に就くために必要なこと

平岡 俊一

(北海道教育大学 教育学部・釧路校)

こんにちは。2006年3月に大学院社会学研究科博士後期課程を修了し、現在は、日本で最も東に位置する4年制大学、北海道教育大学釧路校で勤務しています。

学部(産業社会学部)から大学院まで通算9年間を立命館で過ごし、既に退職されていますが、和田武先生に学部3回生から大学院までご指導いただきました。また、1回生の基礎演習では有賀郁敏先生に、博士論文の審査では竹濱朝美先生と山口歩先生にお世話になりました。後期課程修了後、約3年間、地球温暖化問題について活動しているNGO

で勤務し、さらに約1年半、龍谷大学で博士研究員として勤務したのちに、2010年10月から現大学で勤務しています。

研究分野は環境ガバナンス、環境政策などで、具体的には、市民参加型の環境政策、環境保全活動を通じた地域づくりなどについて、北海道、京都、愛媛などの自治体をフィールドに、現場の活動・政策のお手伝いをしながら研究を進めています。勤務校では、「地域社会と環境」というゼミを担当し、環境社会学、環境教育をはじめとして、社会科系免許取得に係わる社会学、現代社会論に関連す

る科目などを担当しています。

勤務校は教員数が少ないため担当する学 内業務が多く、大変な面もありますが、教員 間の人間関係がよく、また北海道・道東とい う、貴重な自然やユニークな地域活動が多数 存在する地域で仕事ができており、充実した 日々を過ごしています。

大学院生時代は、その後の職場となる NGO に入り浸っておりましたが、社会学研究科では、そうした現場の活動への参加も単位取得等の面で応援していただける制度になっていたため、本当に助かりました。さらに、後期課程在籍時は、今は存在していないと思いますが、助手として採用していただき、経済的なことを心配せずに自由に研究することができました。その他にも院生に対して手厚い支援制度があったため、とても恵まれた環境で院生時代を過ごすことができました。

以下では、現在重要な関心事になっている 方も少なくないと思われます、研究職への就 職活動に関して、私の経験を若干ですが紹介 させていただきます。

就職活動は、ご多分に漏れずとても苦労しました。大学院生時ならびに NGO 勤務時は、今後自分が市民活動の道でいくのか、研究者でいくのか、どっちつかずの状態だったこともあり、身の程もわきまえず、よっぽどの好条件でなければ応募しないなど、就職活動には身が入っていませんでした。それがようやく、任期が切れると後がなくなる博士研究員として働くようになってから火が付き、活動を本格的に行い始めました。

1年半で20件近くの公募に応募しました (院在籍時からも含めると30件近くになり ます)。毎朝、まずJREC-INをチェックし、 少しでも引っかかると思った公募には、応募 していました。応募書類の作成にかかる時間 や郵送料等は相当なものになりましたが、これに関する手間暇は惜しまないようにしていました。

面接には、採用されたものを含めて4回呼ばれました。研究職の面接は、通常数人まで絞った段階で呼ばれるので、当然気合いが入るのと同時にさまざまな期待を抱きながら臨みました。その分、落ちた時は激しく落ち込み、心が折れそうになりました。しかし、既に研究職に就いている知り合いの方々から「面接に呼ばれ始めたらあともう少し」と励まされ、その言葉を心の支えにしながら応募活動を続けました。確かに後から考えると、私も面接に呼ばれ始めてから採用が決まるまで、それほど時間はかかりませんでした。

現在、私自身はまだ人事に直接関わることはありませんが、関係者の話を総合すると、私が勤務しているような地方大学の多くでは、社会的な貢献活動への積極性や経験、学生等とのコミュニケーション能力などが重視されているようです。そうした意味では、研究活動以外にも多様な活動や仕事にチャレンジしておくことは、とても大事なことと思われます。

しかし、それでもやはり研究業績の重要性 自体はどこを受ける場合でも変わらず高い です。私の大学もそうですが、業績の種別ご とに点数付けがなされ、書類審査においては それが重要な判断材料になっています。特に、 学会誌等の査読付き論文は不可欠ですので、 積極的に投稿していくことが求められます。 「人物的にはすごく採りたい人がいたけど、 研究業績が少なかったので見送らざる得な かった」、という話も時々聞きます。

その他には、私自身、大学院生時代にこれを怠り、今でも後悔しているのですが、研究 者仲間のネットワークを積極的に形成して おくことも非常に大事だと思います。情報提供、紹介、お誘い、アドバイスなど、有形無形の様々な恩恵を享受できるチャンスが増えます。有力国立大学等であれば所属研究室の先輩に多数の現役研究者がいるため、あまり意識せずにネットワークが形成されるの

に比べて、残念ながらその他の多くの大学院にはそうした面でハンデがあるように感じます。学会や研究会等に積極的に顔を出して、早い段階からつながりを作っておくことは決して損にならないと思います。

仙台から近況報告

藪 耕太郎

(仙台大学 体育学部)

産業社会学部・社会学研究科の皆さま、大変ご無沙汰しております。早いもので、今春に仙台大学に着任してから、もう8ヶ月が経ちました。東北らしからぬ夏の酷暑も過ぎ去り、秋はあっという間に遠のいて、宮城もいよいよ冬本番、といったところです。京都はまだ晩秋の残滓があるでしょうか。衣笠山の紅葉が美しく想起されますが、今回はそうした思い出話ではなく、ざっくばらんにこの間の経緯と近況の報告をしたいと思います。

さて、まずは昨年度末を思い返せば、年明けに採用が決まったこともあり、家探しに引っ越しにとバタバタしていました。ご挨拶や身辺整理もままならず、気付いたら仙台に住んでいた、というのが実感です。とりわけ家探しには手間取り、被災者の方々のための住宅借り上げ制度に伴う賃貸物件の圧倒的な不足のなかで、猛烈な寒波と大雪の洗礼を浴びながら、必死になって市中の物件を探し回りました。結果的になんとか3月中に根城を確保できましたが、なかには着任後暫くホテル住まいを余儀なくされた先生もいらっしゃったほど、当時の状況は深刻だったようです。

震災といえば、かつて阪神淡路大震災の際に実家が半壊した経験もあるため、やはり余震が怖いです。最近は回数も微減傾向にあるようですが、それでも震度4クラスの揺れがたまにあります。とはいえ幸いにも実害は被っておらず、また生活を送るうえでも支障はありません。ただし、とりわけ沿岸部の被と地域に足を運ぶ機会がありましたが、私の日常と被災地域に足を運ぶ機会がありましたが、私の日常と被災地域に足を運ぶ機会がありましたが、私の日常と被災地域の日常との大きな乖離を改めて意識しました。加えて「がんばろう東北」のような一枚岩のスローガンでは括れない、住民と行政、あるいは住民同士の思惑の相違が、地域レベルで先鋭化しています。

一方で、繁華街を歩けば様々な方言が耳に入り、工事現場には各県のナンバーの車両が並ぶにも関わらず、3.11 を契機に地方からやって来た人々の多くの姿は、ある意味で非実在的です。おそらくは私の不見識のせいですが、復興の一員として現場に臨みながら、しかし必ずしも地域に根差しているわけでもない彼/彼女らの日常は、復興を巡るネガ・ポジ像の狭間で、どこか等閑視されている気がしてなりません。

…と、これでは紙幅が幾らあっても足らないので、話題を近況報告に戻しましょう。現在は、自宅から大学まで片道約1時間強の道のりを、自転車と電車、それに徒歩で通勤しています。昨年度に比べて通勤に費やす運動量が倍以上に増えたので、少しはシェイプアップできるのかと思いきや、豊に図らんや、運動量に比例して(?)体重も増えてしまいました。牛タンにずんだもち、新鮮な海の幸に米どころの地酒と、宮城が誇る酒食の豊かさの前で、ベルトの穴を縮めようなどと考えること自体が無謀なのかもしれません。

ところで仙台大学は、仙台市内からやや南下した柴田郡の船岡という場所にある、体育系の大学です。ちなみに町内には、山本周五郎の『樅の木は残った』で有名な原田甲斐宗輔の居城跡が公園として整備されており、この公園の桜と、そのすぐ脇を流れる白石川沿いに7kmに亘って続く通称「一目千本桜」は、県内屈指の花見の名所です。大学は1学部5学科、学生数約2400名、教員数約100名で構成され、敷地内には体育・スポーツ関連の器材や施設が充実していますが、とりわけボブスレー・スケルトン競技用の練習トラックなどは、冬季スポーツを存分に行える環境ならではの施設といえます。

もっとも私の専門は歴史なので、こうした 施設を利用する機会は殆どありませんが、と もあれ教育・研究に大学運営と、充実した 日々を送っています。これまで体育(会)系 の世界とは殆ど無縁だった私にとって、大学 での日々の生活自体が非常に刺激的なの すが、このたびバドミントン部と準硬式野球 部の副部長に就任したことで、壇上からの眺 めとはまた異なった視点から、学生に接する 機会も得ることができました。こうした課外 活動と座学とをいかに接合すべきか、今は嬉 しい課題に取り組んでいます。

なんだか取り止めの無い話になってしまいましたが、ともあれ衣食住に加えて人にも恵まれ、友人や諸先輩に支えられながら新たな日々を歩んでいます。そして、こうした今の私があるのは、衣笠でお世話になった皆さまのおかげに他なりません。学部・大学院、そして非常勤講師として、延べ14年に亘って慣れ親しんだ第2の故郷を振り返り、かつての学びの経験を活かしながら、新天地でも引き続き精進するつもりです。

それでは最後になりますが、宮城に足をお 運びの際にはどうかお気軽にご連絡くださ い。在勤中にお世話になった妻ともども、楽 しみにお待ちしております。

自分の目標を「しつこく」追いかけよう

ユイス バユス カンパ

(京都外国語大学 外国語学部)

私は、スペインからやってきて、 1997年4月に立命館大学大学院社会 学研究科に入学してから、もうはや16 年になります。この16年間も私の人 生ついてもう一度振り返ってみると、 3つの時期に分けられるかと思います。

第一は、大学院生時代です。博士前 期課程と博士後期課程を含めて5年間 でした。実は、来日したとき、2年間 だけ日本で研究してから、スペインに 帰って、そこで博士号を取る計画でし たが、日本語能力不足で無理であるこ とがすぐわかりました。また、文部省 の奨学金をもらっていたので、結局滞 在期間を延ばして立命館大学で博士号 を取得することにしました。博士論文 を提出した後、取った写真の自分の顔 を見ると、この時期どのぐらい苦労し たのかがわかります。大学院の最初は、 自分の貧し日本語のため、授業内容が 半分しかわからなかったり、本のペー ジー枚を読むとき2時間かかったりし て大変でした。日本語の勉強を「しつ こく」続けて、だんだん楽になりまし たが、自分の研究について悩んだり、 レポート、発表、論文の提出の締め切 り等にいつも追いかけられている毎日 だったという気持ちがします。

苦労したと言っても、研究を通じて 知りたいことがあったこと、勉強に集 中できる環境に恵まれたこと、そして

また、いつもそれぞれの院生のいいと ころを引っ張り出し、励まし、たくさ んのことを教えてくれた指導教員の篠 田武司先生の丁寧な指導を受けたこと で楽しく有益に勉強ができ、無事に大 学院を卒業することができました。そ して、同級生や、先輩や後輩、またほ かの留学生など、たくさんの友達と一 緒に研究の悩みなどを分かち合い、お 互いに助け合ったりして、この時期は 幸せであったとも言えます。日本で新 しく学んだ言葉であった「飲み会」で 友達と一緒にたくさんの面白い話をし たのも暖かい思い出として残っていま す。しかし、皆盛り上がると、自分が 飲んだお酒のせいか、友達が飲んだお 酒のせいか、わからないけど、日本語 がだんだんわかりにくくなって、話が あちこちへ飛んで結局、何が話題にな ったのか、何が話されたのか、何を話 したのか、全くわからないことも時々 ありました。

第二は、非正規雇用の常勤講師の時代です。大学院を卒業したとき、満足感よりも以前よりわからないことがたくさんある気持ちになりました。こんなに頑張ったのに、そのまま帰国したら、中途半端で終わる気持ちになって、中途半端で終わる気持ちになって、それまでは一度も考えたことがなかったスペイン語講師になって、日本社会についての研究を

続けられるように日本に残ることにし ました。しかし、ここでは、現在、変 化しつつある大学の雇用制度の負の側 面を味わうことになりました。いまの 大学の非正規雇用制度(私の場合、語 学の常勤講師) は博士課程を卒業した 人を大学教員として育てる制度とはな っていません。大学における労働のコ スト削減ばかり目指す制度だと思われ てなりません。収入が不安定であり、 担当する授業の数も多く、一方で就職 活動も忙しくて、研究する時間がほと んどなくなりました。ちゃんと勉強で きた大学院時代を懐かしく思い出すよ うになりました。しかし、研究しなけ れば、これまでやってきたことは無意 味になります。さらに、就職するのも ますます難しくなります。だから、で きるだけ共同研究プロジェクトに参加 して、たくさん学ぶようにしました。 夜、部屋にいると、時々、不安や失望 に襲われることがよくありました。し かし、そうした状況の中でも新しい経 験があり、学べることや楽しいことを 見つけ、また友達とお互いに支え合う なかで、あきらめたい気持ちよりも続 けたい気持ちが強く湧いてきたもので す。

第三は、就職してからの現在の時期 です。大学院を卒業してから、10年後 にやっと大学の教員として就職ができ ました。教育と研究を支える環境の中 で教員や研究者として再出発しました。 こんな16年間の歩みでした。最後に、 今の立場から、この 16 年間について もう一度振り返り、結論として何が言 えるのか、後輩たちの皆さんに一言励 ましの言葉を送りたいと思います。あ なたたちが選んだ道は楽ではなく、難 しい道であることを覚悟しなければな りません。その上で、厳しい状況の中 でも自分の目標を達成できるためには、 役立つことや楽しいことを探して、自 分の目標を「しつこく」追かけること が大切だと思います。そして、自分の 勉強ばかりではなく、友達との関係も 大事にし、自分の趣味なども楽しんで、 ストレスをためないで研究を続けてく ださい。